（別紙4）　　令和　3　年度　　（様式1）

1　自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	1971600174		
法人名	有限会社長沼工業所		
事業所名	グループホームふうりん		
所在地	南アルプス市飯野2300番地1		
自己評価作成日	令和　4 年　2　月　16　日	評価結果市町村受理日	令和　　年　　月　　日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/19/index.php

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会
所在地	甲府市北新1－2－12
聞き取り調査日	令和4年3月9日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

利用者さんの出来ることと出来ないこととを見極め、持てる力が発揮できる援助、すなわち安易に手を貸さない「待つ介護」に取り組んでいます。また機能低下を防ぐための運動やリハビリの実施も重要と考え、「最後まで自分の足でトイレに行く」ということを最重要項目ととらえています。利用者さんの行動や気持ちに良くない変化が見られた時には、利用者さんの問題行動とせず、介護者や環境に問題がなかったかを考えるようにしています。夜間以外は自由に出られる玄関から日常的に庭に出て、毎日の日課である戸外への散歩やドライブなどを楽しみ季節を五感で感じていただきながら過ごしていただいています。職員は「自分や自分の親が受けたくない介護は利用者さんに対してしない」をモットーに心からの介護を実践しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

利用者が家庭の延長で生活していると感じられるように、できることはしていただく、役割を持った生活支援を心がけていました。毎日外に出る事を心がけ敷地内には畑がありホウレンソウや夏野菜が作られていました。鶏もいるのどかな環境です。持てる力を発揮されているのか表情がとても良いと感じられます。また運営規定には身体拘束の具体的な内容が示され、職員が理解しやすい支援内容になっていました。運営推進委員には自治会長を始め地域の身近な方の参加もあり、地域に開かれた事業所運営が感じられました。管理者から「日焼けした利用者さんの顔がうれしい」と聞かれました。台所仕事が好きな方、畑仕事が好きな方、針仕事が好きな方、歌を歌うことが好きな方、一人で過ごすことが好きな方、それぞれの人生が送られる支援がされていることが感じられました。

Ⅴ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）		1. ほぼ全ての利用者の
		○	2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）（※感染対策を行い、可能な場所に出かけているか）（※戸外とは事業所の庭に出る等も含みます）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）		1. ほぼ全ての家族と
		○	2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）（※窓越しの面会など距離をとった交流）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う		1. ほぼ全ての家族等が
		○	2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者と職員は理念の意味を深く理解し、全職員が参加して行っている毎月のサービス検討会議の際には理念に基づいていること、利用者さんのための最善の支援方法であるかを全員で確認しながらの話し合いを行っている。理念は目につく場所に掲示している。	事業所理念は開所時に作成されたものを全職員が理解し、共有されていました。「認知症の方でも一人の人間として、ありのままを大切に地域と共に生きていく」という理念に沿った支援を行っていました。理念は玄関に掲示され職員を始め利用者、家族、地域の方等どなたにも理解していただき、支援につなげていました。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入。地域の情報提供をしてくれる。ご近所から季節の果物や野菜、清拭布などをいただいたり日頃の散歩中にも声を掛けていただいている。愛育会との連携も取っている。	地域の一員として自治会に加入し地域活動に参加されていました。コロナ禍で行われていないこともありますが、防災訓練や地域の祭りに参加し、皆と活動や交流会を楽しまれていました。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の場や来訪の際、また折に触れて紹介している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	日中と夕方の時間帯を交互に開催することを目標として開催。書面開催も取り入れた。利用者さんの実際の様子をご覧頂くことに加え、サービス内容や活動の報告は写真を交えた資料を配布。机上の会議だけでなく、体験などもしていただいている。意見や助言をいただいた場合はそれを取り入れたり参考にしたりして、その結果を後日伝えている。	コロナ禍以前は2か月に1度開催され家族や地域の方の意見やサービスの検証がされていました。メンバーには地域の美容室の店主がおり、在宅時代や入所されてからの長いお付き合いをされ、意見を頂いていました。コロナ禍以前は福祉支援団体「愛育委員会」との交流があり、古布の寄贈がされていましたが、中止になり、運営委員会に相談して、地域に回覧をお願いし集めることができるようになっていました。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議への出席(書面開催時は記入書類の返信)を依頼し、事業所内の状況や情報発信を行しながら協力関係を築くようにしている。毎月月末に事業所の空き状況や待機状況の報告し、市役所担当者から問い合わせがあった際には真摯な対応を心掛けている。	市町村には事業所の空き状況や利用者サービスの相談をして関わっていました。地域包括との連携や行政との連絡は運営委員会の課題の取り組み結果など毎月月末に情報を書面等で連絡していました。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化の指針を整備し、定期研修も行っている。全職員が身体拘束の具体的な行為とその弊害を理解して身体拘束のないケアに取り組んでいる。開所以来、玄関も夜間以外は施錠しておらず自由に庭に出られる環境にある。言葉による拘束もないよう注意し、不適切な言葉があった時は職員同士がその場で指導するようにしている。	身体拘束については、定期的に研修をして職員の意識の向上に心がけていました。特に運営規定には具体的な拘束内容が記載され職員に理解しやすいものになっていました。やむをえない拘束時の記録の整備もされています。利用者の不安時等には職員2人で対応する工夫をしていました。現在は、記録する拘束は行われていませんでした。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	会議時などに虐待防止について参考資料なども用いながら理解を深めている。虐待がないよう全職員が取り組んでおり、万が一気になったことがあった場合には職員同士で注意を払うよう決めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去、現在と制度を利用する利用者さんがいないため職員の理解度は低いが、必要とされる場合に備え、折に触れて情報の共有をしている。		
		契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書類だけでなく口頭でも内容ま説明を行い、充分納得した上で契約を交わしている。		

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族等の来所時などには要望、意見を遠慮なく言っていただけるよう職員側から働きかけているが、まずは言いやすいような関係作りを心掛けている。所用で家族に電話をした時も問いかけるようにしている。	運営に関する利用者や家族の意見は、電話連絡や訪問時に要望を聞いていました。普段は玄関に施錠は行いませんが夕方から施錠します、夜間家族が訪問した時、中に入ることができないので対応して欲しいと要望があり、利用者の安全を考慮し家族が面会できるような対策を検討されていました。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者、施設長は日常的に現場におり、意見や提案、相談を随時聞いている。職員連絡ノートの利用、会議時の発言などで職員が自由に意見や要望を言える環境にある。勤務時間の変更や職員体制の見直し、物品購入希望など反映していることも多い。	年度始めに管理者は職員と面談を行い意見を反映させていました。日常的には連絡ノートの活用や他職員にわからないように電話により意見を聞いていました。特に冬場の早朝勤務や子育て中の職員には配慮をして職場環境を整える努力をされていました。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は個々の職員の努力、実績、悩み等を把握しており、可能な限り職場環境や条件の整備に努めて働きやすい環境を保てるよう、柔軟な対応を心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修等に順番で参加できる機会を設けている。研修後はレポート作成により研修の理解を深め、研修後の会議時には研修内容を発表し、参加できなかった職員も知識を共有している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	日常的に交流している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	職員は現状を受け入れ、本人を知る努力をすることに徹し、不安なく暮らしていただけるようまずは優しい声掛けと対応にて信頼関係を築くよう努めている。言葉だけでなく表情や行動からもその方を理解する努力をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	求めていることを良く聞き、安心して任せていただけるよう信頼関係の構築に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人に必要な支援を職員全員で探し、見極めている。本人にとってマイナスになってしまうような過剰介護とならないよう慎重な見極めを行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常の様々な家事、裁縫、畑仕事、各種作業、生き物の世話など、何をするにも職員は利用者さんと一緒に行い、その際の雑談等を通して喜怒哀楽を共にしている。		

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	外部評価 次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	必要品の購入時には一緒に考えてもらったり、自室で家族だけで過ごす時間を設けてもらったりしている。またご自宅で過ごす時間を作っていただいたり、ドライブに行っていただくなどして一緒に支えていただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍のため気軽な交流は出来ていないが、日常の会話の中に話題を盛り込み、交流が再開したときにも違和感のない関係が継続していけるよう取り組んでいる。	外出時にご自宅の周辺まで行ったり、お墓参りに行きお寺さんとお話したり、今の生活を大切にするため近所の方との交流をしていますが、コロナ禍で安全安心の対策が取られていました。コロナ禍での馴染みの方との交流が何とか図れないか検討されていました。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者さん同士が仲良くしていること、助け合おうとしていることを否定せず見守っている。車椅子を押し合ったり、同じ歩調の人で手をつないで歩いてもらったりすることもある。利用者同士で部屋の行き来があったり隣の席同士で声を掛け合ったりしてお互いに支え合っている場面が見られる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	関係者と連絡を取り合い、利用者さんだけでなく家族とも円滑な関係を保っている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	思いを引き出すような声掛けや関わりを行っており、言葉だけでなく表情や行動、言葉の端々から判断し、意向を把握しながら生活の支援をしている。知り得た内容は職員間の引継ぎで共有。また記録に残している。	利用者本人からの要望が訴えられないことがあり、二つの中から選択する支援や表情から探る支援を心がけ、個々を大切にしていました。気付いたことは連絡ノートに記載し、職員間の情報の共有を図っていました。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	普段の会話や生活の様子から生活歴などの情報収集を行い、職員間で情報の共有をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その方に合った生活リズムが送れるよう臨機応変に対応し、また職員間でも情報を共有、状態を把握して支援している。有する力に関しては一度の試みで判断せず、何度か試みるなどしてから判断し、支援方法につなげている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日の引継ぎやミーティング、会議で出された職員からの意見やアイデア、家族からの要望などを計画作成担当者がとりまとめ介護計画に反映している。モニタリングは通常半年に一回となっているが、随時アセスメントを行い、必要があれば適宜計画の見直しも行っている。	日常の寄り添い支援の様子や家族からの要望は共有ノートに記録され、個々の介護計画作成時に活用されていました。家族からは散歩の希望や個々のトイレのタイミングの工夫に要望が出ており、一人ひとりに合った支援の見直しになっていました。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	身体面、精神面を含めた一日の様子や変化、異変、また職員が気付いたことなどを一人ひとりの記録シートか連絡ノートに記録し、全職員が把握できる体制を取っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	開所以来、要望には常に柔軟に対応している。		

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん　〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	日常的に近所の果樹園地帯を散歩したり、公園などに出かけている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所以前のかかりつけ医を引き続き受診している方と、入所を期に協力医・専門医を受診している方とがいる。受診時には職員が同行して現状を伝え、適切な医療を受けられるように努力している。受診結果は全職員で共有、家族への診察結果の報告や受診の相談、医療機関の変更の打診等家族との連絡窓口は施設長に一本化している。	グループホームでは通院は家族が行っていますが、利用者の普段の様子をお伝えする為職員も同行して情報の共有を行っていました。家族が行けない時は職員が行って家族に状況報告がされていました。定期通院報告は月1回管理者から行っていました。現在は通院ができているため訪問診療は行っていませんが法人の他の事業所の看護師の協力体制ができていました。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師は在籍していないが、そのことが利用者さんにとってマイナスとならないよう、全職員が病院受診時に医師や看護師の話を良く聞き、疑問点を解決して不安材料を残さないようにしている。命を預る立場であるため、日頃から情報収集も怠らない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	医療機関とよく話し合っており、信頼関係も構築できつつある。入院中は毎日職員が交代で病院へ出向くなどして、生活環境の変わった利用者さんが安心できるような支援をしている。早期退院については入院時から要望を出しており実現させている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	支援方針について入所時に説明し、理解を得ている。時期が到来した時には改めて話し合いの場を設け、事業所として出来ることや訪問看護の協力体制やご家族の泊まり込みの受け入れなどについて説明。看取りケアは13件実践。お見送りの際には故人が好きだった歌を全員で歌って送り出している。終末期は施設長の泊まり込みもあり夜勤職員の精神的負担の軽減も図っている。	入所時に看取り支援の説明を行い家族と本人がどんな終末期を迎えたいか確認ができていました。家族の希望があれば2・3日看取り介護のための宿泊もできます。望まれる終末支援がされていました。看護体制がないため訪問看護の活用や他事業所の看護師の協力体制もできていました。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救命講習等を職員が順番で受講している、日頃から起こり得る緊急事態とその対処方法を職員間で話し合っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	研修の受講や避難訓練を定期的に実施。ホールの壁には緊急時の実践的なマニュアルを掲示し、有事の際の近隣住民の方の協力体制を確保してある。夜間の地震を想定した避難訓練も実施。訓練後に職員から出た意見には対応し、消防署への自動通報装置の設置も完了している。	避難訓練は定期的に行われていました。近隣には大きな河川や山などはなく自治体のハザードマップ地域にはなっていません。夜間等災害時の地域協力や法人職員の協力体制は確保されていました。	
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	対応、言葉づかいは生活歴や職歴などを考慮して、利用者さんごとに対応している。トイレや入浴の際には羞恥心に配慮した声掛けや対応をしている。職員は入職時に守秘義務について誓約し、利用者さんの情報等が書かれた書類は事務所で管理して持出禁としている。	認知症の高齢者ではありますが一人ひとりが尊重され、トイレ支援や入浴介助は同性介護に努めていました。男性利用者が多少おり職員が1名のため入浴介護時に介助確認を取られていました。各居室にトイレの設置があるので他者からのプライバシーが保護されており、行きたい時に行けるような支援に努めていました。	

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	思いや希望が話しやすい、表現しやすい対応を心がけている。また本人の意思を尊重し、柔軟な対応に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の都合によって利用者さんの気持ちや行動を制限することないよう注意を払い、個々の利用者さんの意向を確認しながらの支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの洋服などが着られる支援をし、衣類の汚れや劣化にも注意を払っている。女性は折に触れてお化粧をすることもある。		
40	（15）	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	会話の中から得た食の好みを生かした献立づくりなどを心がけている。献立は職員が順番で作成し、調理や下準備、配膳、下膳なども一緒に行っている。職員も同じテーブルで昼食を食べている。野菜を庭の畑で育てており、収穫等も楽しみのひとつ。弁当を持った外出、行事食なども頻繁にしている。	献立は支援している職員が利用者の好みを反映し、バランスのよい食事になっていました。敷地内にある畑で利用者と共に作った野菜や一羽いるニワトリの卵を使って一緒に調理を楽しんでいました。利用者ができることは関わり、行事食の誕生日の赤飯、七夕、十五夜にはだんご、おはぎなどを楽しまれていました。外出時にはお弁当を作ってお出かけをしていました。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	バランスの取れた献立作りを心がけ、美味しいと感じていただける味付け、食べやすい形態に配慮している。摂取した水分量は毎回計測し、一日の必要量を確実に摂取できるよう取り組んでいる。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口臭や誤嚥性肺炎にもつながるため、食後の歯磨き、口腔ケアを実施し、清潔が保たれるよう徹底している。		
43	（16）	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の排泄パターンや排泄サインに応じたトイレ誘導を実施。各居室にトイレがあるため、いつでもトイレが使え、プライバシーも守られ、安心して排泄が出来ることも排泄の自立に繋がっている。排泄用品の使用枚数の減や綿パンツへの移行なども出来ている。	各居室にはトイレが設置され、行きたいときに行ける配慮がされていました。「ちょっと待ってて」のない支援です。排泄には力を入れ、入所時リハビリパンツを使用されていた方が布パンツに改善された例もありました。気持ちの良い毎日が送れる支援になっていました。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取量の確保や把握、排便チェックシートの記入、服薬支援等で細かく管理対応をしている。湯水のほか、ゼリーやORS、嗜好品なども取り入れ、水分量の確保やスムーズな排便のための支援は徹底している。		
45	（17）	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	一日おき午後からの入浴が生活パターンになっているが毎日入浴が可能な環境。体調や気分を考慮して強制はせず、時間をずらしたり担当する職員を替えての対応なども行っている。湯温、時間も本人の好みに合わせ、湯上りの飲み物や入浴剤、ゆず湯等の楽しみも取り入れている。	利用者の希望に沿った入浴支援が行われていました。他の高齢者施設は週2回ほどの入浴になっていますが、開所当時から週3から4回の入浴支援を行っていました。入所時に体制上同性介護ができないことは伝えられていますが、その都度確認を取られていました。楽しめる入浴支援になっていました。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	いつでも自由に部屋に行って休息が取れる。体調のほか、前の晩の様子や年齢なども考慮して職員が休息を勧めたり、安心して休める声掛けなども実施している。		

（様式１）

自己評価および外部評価結果

事業所名：グループホームふうりん

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価（実践状況） ユニット名（　　）	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬の目的や副作用、用法を全職員が理解と把握をし、細心の注意を払って用意して配り、誤薬事故を防いでいる。服薬確認も行い、服用後に見られた変化なども記録している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	炊事、洗濯、掃除、動物の世話、畑仕事、裁縫などその型に合った軽作業を声掛けにより気分良く行ってもらっている。強制もせず、出来の良し悪しも問わない。散歩やドライブ、買物、行事、外食などを通して楽しさを感じていただけるよう職員が毎日企画して実践している。		
49	（18）	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自由に庭に出られる環境であり、一年中ほぼ毎日門外へ散歩やドライブに出掛けている。気分転換のほか、歩く機会が増えるため、良い運動の機会にもなっている。日常会話から得られた意向も大事にし、新聞やテレビで紹介され興味を示していた場所などにも積極的に出掛けている。	庭には自由に出られ、外気を楽しまれていました。足腰を鍛えるため安全対策の手すりのそばにブロックが設置して楽しみながら鍛えていました。職員と散歩に行き、段差のある公園や図書館の階段を利用するなど身近な環境で足腰を鍛え健康を保っていました。コロナ禍でも安全を図り楽しみな外出を提供していました。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は事務所で行っているが、いつでも自由に使うことが出来ることを話し、納得していただいている。個人的な買物の要望があれば預かっているお金を持って一緒に買物に出掛け、自分で選び、会計をしてもらうこともある。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	手紙や年賀状を出すなどの支援をしている。家族の了解を得ている方は自ら電話を掛けることもある。所用でかかってきた電話に出て話してもらうことなどもある。		
52	（19）	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	廊下、ホール、居室前が全面サッシで日当たりも良好。庭に面しているので、利用者さんは外を眺めたり、自由に庭に出たりして季節の変化を感じ取れる。またホールや庭からは富士山も見える。玄関の壁には利用者さん制作品や季節の花などを飾ってある。	居室やホールは陽当たりもよく富士山が眺められます。ホールには利用者の作品が飾られまた季節感のある展示がされていました。飾りつけは子供っぽさのない大人の飾りつけに配慮して落ち着いた雰囲気を出していました。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	仲間同士で会話を楽しめたり、一人で過ごしたり、自由に過ごしていただいている。		
54	（20）	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の入り口にはポストと木製の表札が掲げられている。居室内には家族の写真、記念の品、仏壇、人形、馴染みの家具なども置かれ、自宅で使っていた寝具や家電製品などを持ち込んでいる方もいる。居室内は畳とフロアーが半々になっており、好きなように使っていただける。	今までの生活習慣を大切に、自宅で使っていた身近なものが置かれていました。ご飯茶わん、汁椀、お箸、湯飲みは使っていたものを持ってきていただいていました。また居室の入り口には表札があり自宅を感じさせる配慮がされていました。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者さんが歩く所にはすべて手すりが取り付けられている。居室内のトイレの手すりは利用者さんごとに取り付け場所が変えられている。説明書があれば自分で出来る方などのために張り紙をしておくこともある。		